

美術の資質・能力を育む授業の工夫

竹内 まな

1. 美術科研究主題について

(1) これまでの本校美術科の研究

平成26年度から平成28年度の3か年は、『「深く考える授業」の創造』という全体研究主題の基、「美術の基礎的な力を伸ばす授業の工夫」を研究主題とし、美術の基礎的な力を伸ばすことを目指し、それまでの取組を継続して題材と指導の工夫に取り組んだ。特に2,3年次には、全体研究において深く考えるための手だてとして掲げられた「視点を変える活動」を取り入れた授業を行った。その結果、表現と鑑賞の学習において、友だちと意見を交流したり、資料を用いることで知識と出会ったりするなどして視点を変えることにより、よりよいものを目指して試行錯誤する生徒の姿が見られるようになってきた。

平成29年度から平成31年度の3か年は、『新たな世界を主体的に創造する生徒の育成～「見方・考え方」を働かせた学びを通して～』という全体研究主題の基、「美術の資質・能力を育む授業の工夫」を研究主題とし、造形的な見方・考え方を働かせた学びに着目した題材構成や授業の手立ての検討、実践を行うとともに、それらを通して育まれた資質・能力を見取ることについて研究を行った。その結果、授業構成とワークシートの2点を工夫することにより、生徒自身の学習調整を促してきた。

令和3年度は、全体研究において『創造性に富んだ、未来を切り拓く生徒の育成～「主体的な学び」のプロセスモデル実現を目指して～』という主題の基、未来を切り拓く生徒に必要と考えられる「自ら問い続ける力」と「創造性」に着目し、「主体的な学び」のプロセスモデルやその評価について研究を行っていく。

(2) 生徒の実態

生徒たちは、情報通信技術の発達により豊かな視覚情報のなかで生活している。インターネットを利用し検索することで簡単に情報が入手できる一方で、自分独自のものを生み出すことが難しくなっていると感じる。また、多様な情報が発信されているにもかかわらず、画一的な価値観が主流となっていたり、特定の価値観を絶対的なものと受け止め、捉えなおす機会そのものが失われてしまったりしている様子も見受けられる。

生活面においては、失敗することを恐れたり、また自分で試すことなく正解を求めたりする姿がたびたび見られる。失敗を恐れることで、失敗して学ぶという経験が少なかったり、最短で正解することに重きを置くことで試行錯誤する経験が限られていたりすることが考えられる。

学習活動においては、概して意欲が高く主体的に取り組もうとする。美術科の学習においても、課題の内容や取り組み方がわかると積極的に取り組む。表現の学習では、自ら感じ取ったことや思ったことなどを基に描いたりつくったりする。また、見る人や使う人の立場に立ってデザインや工芸などに表現したりする。鑑賞では、自由に考えを述べる雰囲気をつくることで、作品から豊かに感じ取り、自分が感じたことを言葉にし、友達と意見を交換することができる。また、日常的に美術に触れる機会があり、山梨県立美術館など美術館を訪れた経験のある生徒も比較的多い。一方で、美術の授業を通して身に付けたい力や目指すところなどを理解し、取り組んでいる生徒は少ないように感じている。そのため、学んだことを日常生活で生かす経験も限られているようである。

このような生徒に対して、よりよいものをめざして試行錯誤を続ける態度を育てるとともに、造形的な視点を持ち、生活や社会の中で美術、美術文化などと豊かに関わる資質・能力をさらに伸ばしていきたいと考えている。

(3) 全体研究主題より

①美術科で育成する「創造性」について

全体研究において「創造性」は、①課題の解決に向けて②これまでに学んだことや新たな知、技術革新を結び付けて活かし、③新たな価値を創り出すために必要な資質・能力だと述べており、これは文部科学省が示す「Society5.0を牽引する人材」の資質・能力と一致するとしている。

ここで、「造形的な見方・考え方を働かせた学び」について目を向けてみる。美術科の特質に応じた物事を捉える視点や考え方である造形的な見方・考え方とは、表現及び鑑賞の活動を通して、よさや美しさなど

の価値や心情などを感じ取る力である感性や、想像力を働かせ、対象や事象を造形的な視点で捉え、自分としての意味や価値をつくりだすことであり、これこそ美術科で育成する「創造性」であると考え。

②美術科における「主体的な学び」のプロセスモデルの実践

美術科ではこれまでも、学習指導要領の美術科の目標で示された(1)「知識及び技能」、(2)「思考力、判断力、表現力等」、(3)「学びに向かう力、人間性等」の関連を明確にした授業計画について研究してきた。その中で明らかにしてきた授業づくりの要素を活用することが、プロセスモデルの実践につながり、そして前述した「創造性」を育むことができると考える。授業づくりの要素として、「問いをもつことのできる題材」「題材の導入の工夫」「ワークシートと生徒への働きかけ」の三つを掲げてきた。特に、生徒の実態を把握し、それに合った題材を検討することで精選される「問いをもつことのできる題材」により、生徒自身が問いをもち、その解決に向けて主体的に取り組むことができると考える。

(4) 本年度の研究主題

「1 (1) これまでの本校美術科の研究」でも述べた通り、平成29年度から平成31年度の3か年は、『新たな世界を主体的に創造する生徒の育成～「見方・考え方」を働かせた学びを通して～』という全体研究主題の基、「美術の資質・能力を育む授業の工夫」を研究主題とし、研究を行ってきた。

このとき全体研究においては、見方・考え方を働かせた学びと、それによって育まれた資質・能力を見取るための評価の工夫、そして教科等横断的な教育課程の編成の大きく3つが内容として掲げられた。そこで美術科では、造形的な見方・考え方を働かせた学びに注目し、題材構成や授業の手立ての検討、実践を行うとともに、それらを通して育まれた資質・能力の見取りについて研究を行い、生徒自身による自己調整を促してきた。

昨年度の研究では、「主体的な学び」のプロセスモデルを参考にして題材計画の整理を行い、「主体的な学び」の評価方法について、ワークシートなどの構成の整理や、題材や授業のねらいの明確化によって、生徒自身の主体的な学びに向かう態度が見取れるように研究を進めてきた。また、各学年における題材同士の広がりや深まりに注目して年間指導計画の見直しを行い、教科横断的な教育課程編成を目指してきた。

本年度から完全実施となった学習指導要領では、まず美術科の目標について、美術科において育成を目指す資質・能力をより明確にするため(1)「知識及び技能」、(2)「思考力、判断力、表現力等」、(3)「学びに向かう力、人間性等」に整理して示している。さらに、美術科で目指す資質・能力の育成について、目標で示されている(1)、(2)、(3)が相互に関連し合い、一体となって働くことが重要だとしている。次に、教科の目標と資質・能力の関係については、次の表1のように表されている(「平成29年度版 中学校新学習指導要領の展開 美術編」p.17より抜粋)。この表を基に、これまでの学習のねらいや評価について、新学習指導要領によるものとの対応や整合性を検討しながら取り組んできた。

表1 教科の目標と資質・能力の関連

表現及び鑑賞の幅広い活動を通して、造形的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の美術や美術文化と豊かに関わる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。		
知識及び技能	(1)対象や事象を捉える造形的な視点について理解するとともに、	表現方法を創意工夫し、創造的に表わすことができるようにする。 (創造的に表現する技能)
思考力、判断力、表現力等	(2)造形的なよさや美しさ表現の意図と工夫、美術の働きなどについて考え、(発想や構想と鑑賞の双方に重なる資質・能力)	美術や美術文化に対する見方や感じ方を深めたりすることができるようにする。 (鑑賞に関する資質・能力)
	主題を生み出し豊かに発想し構想を練ったり、 (発想や構想に関する資質・能力)	
学びに向かう力、人間性等	(3)美術の創造活動の喜びを味わい、美術を愛好する心情を育み、感性を豊かにし、心豊かな生活を創造していく態度を養い、豊かな情操を培う。(全ての指導項目)	

このような学習指導要領の改訂と昨年度の研究を踏まえて、課題として考えられることは二つある。

一つ目の課題は、分かりやすい題材の学習目標（ねらい）の設定である。創造的で主体的な学習活動を実現するためには、「問いをもつことができる題材」でなければならない。問いの解決に向かおうとすることが、主体的な学習活動に結びつくと考えられるからである。そのためにはまず、ねらいを明確にし、生徒と共有する。生徒がねらいに向かって主題を生み出し、それを作品に実現するための問いを自身に投げかける場面が生まれるように工夫する。そのことによって、主体的に、知識を活用させるなどしながら構想したり技能を働かせたりすることができ、結果として創造的な学習活動が実現するからである。

二つ目は、「主体的に学習に取り組む態度」の評価である。「主体的に学習に取り組む態度」は「知識及び技能」や「思考力、判断力、表現力等」を発揮し、身につけようとする態度ということができる。したがって、資質・能力の相互の関係を整理しながら、「内容のまとまりごとの評価規準」を作成し、その上で「題材の評価規準」を作成することに取り組み、実際の学習活動からの見取りや評価材を評価した際の成果と課題を明らかにし、さらに研究を深める。

これらのことから、本年度美術科では、研究主題を「美術の資質・能力を育む授業の工夫」とし、教科の目標で示された（１），（２），（３）を相互に関連付けた授業を行うとともに、その中で育まれた資質・能力の見取りについて明らかにする。

2. 研究の目的

生徒が主体的に課題に取り組み、身に付けた知識や技能を活用し、表現及び鑑賞の幅広い活動の中で「造形的な見方・考え方を働かせる」ことをとおして、自分の表現したいことや考えたこと、理解の状況等を、自ら把握し、学習を調整しながら主体的に学習に取り組む態度を養う。

3. 研究の内容

- ① 生徒が「思いや意図」をもち、主体的に課題に取り組めるような題材を設定する。
 - ・主体的に意欲をもって表現や鑑賞の学習ができるような題材や授業の開発
- ② 美術科の目標で示された（１），（２），（３）の関連を明確にした授業計画を立てる。
 - ・ねらいや学習内容などが整理できる、言語活動やワークシートの工夫
 - ・PDCA サイクルの中で、より主体的に学習ができるような授業づくり
- ③ 授業により育まれた資質・能力の見取りについて実践を重ねる。

4. 2か年の研究の見通し

2年目である令和3年度は、1年目の実践を基に、進めてきた美術科で育成する「創造性」について整理するとともに、「主体的な学び」のプロセルモデルの実践及び「主体的に学習に取り組む態度」の評価について研究を進め、授業改善とともにさらなる評価方法の整理を行うこととする。

5. 授業実践事例

（１）題材名

「14歳の主張 ～心のイメージを形に～」(全8時間)

「A 表現」(1)ア(ア)(2)ア(ア) 「B 鑑賞」(1)ア(ア) [共通事項]

（２）題材について

①生徒の実態

2学年は、全体的に明るく活発で、学習や行事に真剣に取り組む生徒が多い。美術科の学習でも、課題の内容や方法を理解して熱心に取り組む姿が見られ、授業の制作を楽しみにしている生徒も多く見られる。

表現の学習では、設定されたテーマを理解し、材料や用具を工夫して使いながら取り組むことができる。これまでの学習では、新聞紙を芯材としてマスコットキャラクターを立体的に制作する活動や、自分の思いを体のプロポーションや一瞬の動きで表現し立体的に制作する活動などを通して、形を単純化したり強調したりして構成することや材料の特徴に注目して、作品に表してきた。

鑑賞では、作品について色や形などの特徴や感じ方を考えながら、自分の言葉で記述したり、仲間の意見に興味を持って聞いたりすることができる。このような実態をふまえ、試行錯誤を繰り返しながらよりよい表現を追究する態度を身につけさせたいと考えている。

②題材観

本題材は、今まで自分が経験してきた出来事を振り返り、その中で得た考えや思いを主題として、形を発想、構想し、抽象形の立体作品として表現するものである。それらの過程を通して、抽象表現に親しみ、抽象表現を行う意義について考えさせる機会としたい。これまで生活してきた社会の中で、生徒自身が考えたり感じたりしたことをテーマとして設定することで、主題について主体的に生み出すことができると考える。素材は画用紙や工作用紙の他に、段ボールやスチロール、アルミホイルなど多様な材質のものを選択できるようにする。これによって主題に迫るための多様な表現が可能となり、試行錯誤しながら自分のイメージにより近づけることができる。

③指導観

題材の導入では、抽象表現の作品を鑑賞し、様々な表現の工夫に触れ、作品に対する見方や感じ方を深める。最初に鑑賞の機会を設定することで、様々な表現の工夫に触れ、イメージを膨らませるきっかけとしたい。次に、自分の経験を振り返り、自分の持つ考えや思いを書き出す。そして、それらを主題とし、色や形、材質などを工夫して表現する。

指導にあたっては、今、自分が取り組んでいることやそのとき感じたり考えたりしていることに注目できるように、ワークシートを工夫する。また、表わしたいイメージを表現できるように、試行錯誤する時間を十分に確保する。さらに、多様な感じ方に触れることができるように、相互鑑賞の機会を設定する。

(3) 全体研究と関わって

全体研究では、昨年度から「創造性に富んだ、未来を切り拓く生徒の育成～『主体的な学び』のプロセスモデル実現を目指して～」という主題の基、研究を進めている。

これを受けて美術科では、次のような生徒を目指したいと考える。ひとつは、身の回りの形や色彩などの働きに気付いたり、よさや美しさを感じ取ったりすることができるような、造形的な視点をもった生徒である。もうひとつは、造形的な視点を基にどのような考え方で思考するかを生徒自身が理解し、学習を調整しながら課題解決に向けて主体的に取り組むことができる生徒である。

そのために、題材の指導計画を見直し、造形的な見方・考え方を軸にして、育む資質・能力を明らかにすることとする。また、造形的な見方・考え方を働かせた学びによって育成された資質・能力を見取ることができる手だてを工夫することとし、今年度は、問いをもつことのできる題材の構成と、それを支えるワークシートと生徒への働きかけに重点を置いて取り組む。

(4) 学習指導要領上の位置づけ

「A 表現」

(1) 表現の活動を通して、次のとおり発想や構想に関する資質・能力を育成する。

ア 感じとったことや考えたことなどを基に、絵や彫刻などに表現する活動を通して、発想や構想に関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。

(ア) 対象や事象を深く見詰め感じ取ったことや考えたこと、夢、想像や感情などの心の世界などを基に主題を生み出し、単純化や省略、強調、材料の組み合わせなどを考え、創造的な構成を工夫し、心豊かに表現する構想を練ること。

(2) 表現の活動を通して、次のとおり技能に関する資質・能力を育成する。

ア 発想や構想したことなどを基に、表現する活動を通して、技能に関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。

(ア) 材料や用具の特性を生かし、意図に応じて自分の表現方法を追求して創造的に表すこと。

「B 鑑賞」

(1) 鑑賞の活動を通して、次のとおり鑑賞に関する資質・能力を育成する。

ア 美術作品などの見方や感じ方を深める活動を通して、鑑賞に関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。

(ア) 造形的なよさや美しさを感じ取り、作者の心情や表現の意図と創造的な工夫などについて考えるなどして、美意識を高め、見方や感じ方を深めること。

イ 生活や社会の中の美術の働きや美術文化についての見方や感じ方を深める活動を通して、鑑賞に関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。

(ア) 身近な環境の中に見られる造形的な美しさなどを感じ取り、安らぎと自然との共生などの視点か

ら生活や社会を美しく豊かにする美術の働きについて考えるなどして、見方や感じ方を深めること。

〔共通事項〕

(1) 「A 表現」及び「B 鑑賞」の指導を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。

ア 形や色彩、材料、光などの性質や、それらが感情にもたらす効果などを理解すること

イ 造形的な特徴などを基に、全体のイメージや作風などで捉えることを理解すること。

(5) 題材の目標及び題材の評価規準

①題材の目標

自分の経験を通して持った考えを基に主題を生み出し、形や色を発想、構想し、抽象表現の立体作品で表現することができる。

②題材の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
<p>知 形や色彩、材料などの性質、それらが感情にもたらす効果、造形的な特徴などを基に、全体のイメージや作風などで捉えることを理解している。</p> <p>技 材料や用具の特性を生かし、意図に応じて自分の表現方法を創意工夫し、制作の順序などを総合的に考えながら、見直しをもって表している。</p>	<p>発 経験を通して感じた思いや考えたことを基に主題を生み出し、単純化や強調、材料の組合せなどを考え、創造的な構成を工夫し、心豊かに表現する構想を練ることができる。</p> <p>鑑 造形的なよさや美しさを感じ取り、作者の心情や表現の意図と創造的な工夫などについて考えるなどして、美意識を高め、見方や感じ方を深めている。</p>	<p>態表 美術の創造活動の喜びを味わい表したいイメージを基にした表現の学習活動に取り組もうとしている。</p> <p>態鑑 美術の創造活動の喜びを味わい主体的に作品や美術文化などの鑑賞の学習活動に取り組もうとしている。</p>

(6) 題材の指導計画 (全8時間)

時間	学習内容	観点別評価		
		知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
1	抽象表現による作品を鑑賞し、表現方法や感じ方に注目する。		鑑 造形的なよさや美しさを感じ取り、作者の表現の意図について考えるなどして、見方や感じ方を深めている。(活動観察・ワークシート)	態鑑 美術の創造活動の喜びを味わい主体的に抽象表現の作品の鑑賞の学習活動に取り組もうとしている。(活動観察・ワークシート)
2 3	自分が表現したいことを基に、抽象表現による作品について構想する。材料の特徴を活かして形や色を工夫し、表現するための形を構想する。		発 経験を通して感じた思いや考えたことを基に主題を生み出し、単純化や強調、材料の組合せなどを考え、創造的な構成を工夫し、心豊かに表現する構想を練ることができる。(ワークシート・活動観察)	態表 美術の創造活動の喜びを味わい表したいイメージを基にした表現の学習活動に取り組もうとしている。(活動観察・ワークシート)
4 5 6	感じ方を考えながら、材料を組み合わせ、表したい思いを構成する。	<p>知 形や色彩、材料などの性質、それらが感情にもたらす効果、造形的な特徴などを基に、全体のイメージや作風などで捉えることを理解している。(活動観察)</p> <p>技 材料や用具の特性を生かし、意図</p>		

7		に応じて自分の表現方法を創意工夫し、制作の順序などを総合的に考えながら、見直しをもって表している。(活動観察)		
8	制作した作品について振り返る。		鑑 仲間の作品を鑑賞し、表現の工夫を感じとるなどして、見方や感じ方を深めている。(鑑賞シート)	鑑 主体的に鑑賞活動に取り組む、よさや工夫を見つけようとしている。(鑑賞シート)

※全8時間中、1時間目を導入、2時間目および3,4,5,6,7時間目を展開、8時間目をまとめとする。

(7) 本時の授業

- ①日 時 令和3年10月20日(水)
- ②対 象 2年2組生徒 男子 18名, 女子 17名 計35名
- ③ねらい
 - ・抽象表現による作品の鑑賞の学習活動へ主体的に取り組むことができる。
 - ・作品の鑑賞を通して、抽象的な表現のよさについて見方や感じ方を深めることができる。

④展開 (1/8)

時間	○学習活動 ・活動の内容、指導のポイント	評価			指導上の留意点
		知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度	
導入 5分	○題材の学習内容について知る ・自分の経験から得た考えや思いについて、幾何学的な形や色を用いて表現する。 ○本時のねらいを知る。 ・抽象表現作品を鑑賞し、表現のよさについて考える。			○	・本時の学習内容やねらいについて簡潔に伝え、生徒が理解して取り組むことができるようにする。
展開 40分	○抽象表現のイメージを確認する。(5分) ➢ マーク・ロスコ 《「壁画 No.4」のためのスケッチ》 【発問】抽象美術にどのようなイメージを持っているだろうか。 ○抽象表現による作品を鑑賞する。(25分) ➢ 岡本太郎《樹人》 ➢ フランク・ステラ《リュネヴィル》 【発問】作品を見て、どんなことを感じるだろう。また、そのように感じるのはなぜだろう。 ○ワークシートにまとめた考えを発表させ共有する。(10分) ・色や形から感じたイメージを基に作品について考えたことを確認する。 【発問】抽象で表現することには、どんな意味があるだろう。 ・抽象的な表現では、自分の感覚を通して、形や色、質感などから感じることもそのものが重要であることを伝える。	○	○ ◎	○ ○	・感じたことや考えたことをなるべく具体的に言語化させる。

まとめ 5分	○まとめ ・振り返りシートを用いて学習を振り返る。			○	・鑑賞を通して考えたことや気づいたことなどについて全体で共有できるようにする。
-----------	------------------------------	--	--	---	---

①日 時 令和3年10月27日(水)

②対 象 2年2組生徒 男子 18名, 女子 17名 計 35名

③ねらい

・自分の経験から得た考えや思いを基に、形や色に宿るイメージを用いて抽象表現として構成することができる。

④展開 (2/8)

時間	○学習活動 ・活動の内容, 指導のポイント	評価			指導上の留意点
		知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度	
導入 5分	○本時の学習内容について知る ・自分の経験から得た考えや思いについて, 形や色を用いて表現する。 ○本時のねらいを知る。 ・形や色に宿るイメージを用いて, 考えや思いを抽象によって表現する。	○			・本時の学習内容やねらいについて簡潔に伝え, 生徒が理解して取り組むことができるようにする ・前時の振り返りを行い, 表現のポイントを意識させる。
展開 40分	○思いや考えを表現するための形について考える。 ・感情を表すオノマトペを参考に, 感情を表すのにふさわしいと感じた形を描き出す。 ○「心の声」をテーマとして, 自分の経験を振り返り, 表現したい思いや考えの構想を練る。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;">【発問】自分の「心の声」を託すのにふさわしい形や色はどんなものだろう。</div> ・自分の「心の声」にふさわしい形を考え, クロッキー帳に描き出す。	○	○		・表現の幅が狭くならないように, 絵文字や記号を用いず表現することを伝える。 ・自分の経験から具体化しながら, 表したい思いや考えについて考えることを伝える。 ・形や色などに意味を持たせた表現することを伝える。最終的には立体作品としての配置も考慮することを確認する。 ・机間指導の際に, 表現したい思いや工夫したい点についてやりとりを行って思考を深めるようにする。
		○	◎	○	
まとめ 5分	○まとめ ・振り返りシートを用いて学習を振り返る。			○	・表現する中で考えたことや気づいたことなどについて全体で共有できるようにする。

(8) 本実践の成果と課題

成果としては、題材計画を整理したことで、活動の内容が明確になった点である。また、ワークシートの構成を整理したことで、思考が構造化されたと考える。課題として、授業構成については、生徒への主題のめたせ方をわかりやすくするとともに、生徒自身が問いをもって作品制作に向かえるようにしていきたい。また、制作への意欲が途中で完結することなく、試行錯誤の過程を経て、さらによりよく表わしたいという思いを持ち続けられるような構成を目指していきたい。

7. 研究のまとめ

本年度は「美術の資質・能力を育む授業の工夫」という研究主題の基、生徒が主体的に課題に取り組み、身に付けた知識や技能を活用し、表現及び鑑賞の幅広い活動の中で「造形的な見方・考え方を働かせる」ことを通して、自分の表現したいことや考えたこと、理解の状況等を、他者や社会との関係の中で客観的に見つめる態度を養うことを目的として研究を進めてきた。ここでは、「主体的な学び」の評価方法を中心として整理したことを振り返り、本年度の研究のまとめとする。さらに、美術の資質・能力を育む授業づくりの要素を整理することで、2か年の研究のまとめとする。

(1) 評価方法について整理されたこと

「主体的な学び」の評価については、知識・技能や思考・判断と一体的に見取るものであるため、題材を通してつけさせたい力を明確にしなが、生徒の気づきを明らかにしていくことが必要である。そのためにワークシートの構成を整理し、生徒自身による振り返りからの見取りを行った。実践を通して、思考過程を言葉や図などで表出させることで生徒自身の考えが整理されるようになり、継続することで学習調整の能力をつけることに繋がっていくと感じた。また、主体的な学びを育むためには、学びを作る言葉がけが重要であり、創造活動を通して生徒自身が自分としての意味や価値をつくり出すには、題材全体のねらいを基に、各活動のねらいを明確にし、教師と生徒とのやりとりを通して考えを表出させることが大切だと考えられる。

一方で、主体的な学びにつなげるには知識をどのように活用するのかを生徒自身が考える必要がある。知識の活用については、生徒自身が既にもっている知識を取捨選択できるように既習事項を提示することや、体験的に知識を習得する機会が必要だと感じた。主体的な学びにつながる粘り強さをもつためには生徒が試行錯誤する機会も確保できるように、今後題材計画を検討する際に、注目して取り組んでいきたい。

(2) 授業づくりの要素について

本研究では、授業づくりの要素を「問いをもつことのできる題材」「題材の導入の工夫」「ワークシートと生徒への働きかけ」として授業の構成を整理した。「問いをもつことのできる題材」「題材の導入の工夫」については、生徒自身が主題を見つけることが主体的な学びにつながると考えられるため、創造活動に向かう際に表現したくなるような題材の提示方法が大切だと感じた。導入で提示する作品選定に幅を持たせるなど、生徒の関心を引き出す工夫や、生徒自身の思いに向き合わせる場面を作ることが重要だと考えられる。また、「問いをもつことのできる題材」については、生徒の実態を把握し、題材のねらいや目的を生徒自身が理解して活動に向かえるような、投げかけとなる題材選定をしていく必要がある。「ワークシートと生徒への働きかけ」の工夫によって、題材のねらいを確認させることが、主体的な学びにつながっていくと考えられる。今後も、生徒自身がわかって取り組み、そして資質・能力を育んでいけるような授業実践ができるよう、研究を進めていきたい。

5. 参考文献

- 教育課程部会教育課程企画特別部会 (2016) 「各教科等別ワーキンググループ等の議論の取りまとめについて」
国立教育政策研究所 教育課程研究センター (2020) 『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 (中学校 美術)』
国立教育政策研究所 教育課程研究センター (2011) 「評価規準の作成, 評価方法等の工夫改善のための参考資料 (中学校 美術)』
永関和雄・安藤聖子編著 (2018) 「平成 29 年度改訂 中学校教育課程実践講座 美術」
福本謹一・村上尚徳編著 (2017) 「平成 29 年度版 中学校新学習指導要領の展開 美術編」
文部科学省 (2008) 「中学校学習指導要領解説 美術編」
文部科学省 (2017) 「中学校学習指導要領解説 総則編」
文部科学省 (2017) 「中学校学習指導要領解説 美術編」
山梨大学教育人間科学部附属中学校 (2015) 「平成 26 年度 研究紀要」
山梨大学教育人間科学部附属中学校 (2016) 「平成 27 年度 研究紀要」
山梨大学教育学部附属中学校 (2017) 「平成 28 年度 研究紀要」
山梨大学教育学部附属中学校 (2018) 「平成 29 年度 研究紀要」
山梨大学教育学部附属中学校 (2019) 「平成 30 年度 研究紀要」
山梨大学教育学部附属中学校 (2020) 「令和元年度 研究紀要」